

第六号：第一首～第二十八首

第六号の1から28までをまとめてみたい。

「この度は目新しいことを論しはじめるが、心を静めて聞いてほしい。何事もすべて神のする事であり、神が論している事だから、側にいる者も何も心配はいらない。神がつけているこの道は、この世を確かに治める真の道である(1～4)。

上に立つ人々に『火』と『水』に代表されるような神の守護を判然と分かせたなら、火水が混濁するような事態もおのずと治まり、何から何まで陽気な世の中になる。ここで神の守護を分かせるといのは、『陽気づとめ』をするのだと考えよ。つまり、今までに教えたことのない『陽気づとめ』を再び世界を創めるようにつとめて、この世を確かに治める(5～8)。

この世界に込められている月日(=親神)の心を知っている者は誰もいないだろう。どんな事も収穫の秋には現れてくるから、それを合図にして『陽気づとめ』に早く取り掛かってほしい。人々の心にかかるもやが晴れたなら、やがて神の心も分かり、人々の心の育ち具合に応じて神の働きも見えてくる。そうして神の働きがはっきりと分かってきたなら、それから先はこの道が確かな道であると楽しんで通るがよい(9～16)。

だんだんと心勇んで『つとめ』の実行を急いでくれ。『つとめ』を勤める者の真心を神が受け取ったなら、神の胸の内も一切伝えよう。しかし、そのように神が急いでも『つとめ』を勤める者が実際十人揃わなければ事は運べない。というのも、その十人のうち教祖の片腕とも頼むべき三人の者には、その心に依じて神の働きが退いてしまうからである。しっかり承知してほしい。その者たちの身に生じることは病気ではなく、神の自由自在の働きを知らせたいがゆえに現れてくる事なのである(17～23)。

今までは時期尚早であったが、これからは真実を説いて聞かせる。今まではどんな神々も沢山あって、拜んだり祈祷したりすれば利益があるように言ってきたが、そうした神業の根本の理はこの世を創めた親神以外に誰も知らない。もしそうした根本の理を知っている者があるなら、神が許すからどこへでも訪ねてみるがよい(24～28)。」

今回から第六号に入るが、まず印象的なのは「何事もすべて神のする事であり、神が論している事である」(2)という言葉である。この世界の主宰者が親神であること、すなわち自分の身に起こる事柄の第一の原因が“人”ではなく“親神”であることを腹の底から納得することは、天理に従って生きる者の第一の課題であろう。それは、たとえば「私が歩く」のではなく、「私は親神によって歩かせて頂いている」ことへの納得だといえる。前号でも、教祖のもとへ警察がやってくる事態も親神の深い思惑によってそうなるのだと論されていた。

では、どうすればそのように納得できるのであろう。あるいは、そのように教えられていながら、なぜ納得できないのだろう。真摯に反省してみると、その要因の一つは、自分のなかにある「恩義を受けたくない」という気持ちではないかと思われる。

私たちは、たとえば、何かプレゼントされたら嬉しい気持ちになる。しかし、その反面、返礼が気になってもいるだろう。「ありがとう」だけで済む場合もあれば、プレゼントによっては「何

かお返ししなければならぬ」という“返礼の義務”が生じる。そうすると、せつかくの好意も受け取りを拒みたくなくなる。感謝と義務感は紙一重だ。そうして私のなかに「恩義を受けたくない」という気持ちが芽生え“仕方なく”受け取ったりする。

ここでいう送り主こそ、親神である。親神は私たちにいのちをはじめ、すべてを与えられている。しかし、どれほどの恵みであっても、返礼の義務を感じてしまえば受け取りたくない。とはいえ、与えはすでに与えられており、“大人”として返さないわけにはいかない。そこで私たちは面目を保つようにとりあえずカタチだけでもその義務を果たそうとする。それは、「本心では恩義を受けたくはなかったが、天理教の神様に世話になったから仕方なく教会の活動に参加する」といった態度ともいえよう。しかし、このような態度は大変負担に思う。なぜなら、親神に与えられているものは人間が返せるものではなく、その義務はいつまでも終わらないからである。そうして、いつしか返せない負債を背負う感覚に襲われる。

こう考えると、言葉で「ご恩報じ」を掲げても心の内に義務感があるなら、実際には“恩義を返すフリ”をしているだけといえよう。たとえ人だすけをしても、救済主である親神が何か恩着せがましい存在に思えば、本来の人だすけにはなっていない。自分なりの理想を掲げて“行い”としては一生懸命したとしても、である。つまり、それは親神を遠ざけて“自立”しようと努めている姿ともいえる。親神の存在に比べると、この自分がちっぽけに感じられて、与えられる一方の現実に耐えられない。そこでせめて人だすけをしなければと焦燥するのである。人だすけの主が無意識的に“自分”になっている。

このような気持ちになる前提には、そもそも自分が「自立できる存在」だという思い込みがある。自分一人では生きることができない。不思議なことに、私は、たったそれだけの事実を取り損ねている。「恩義を受けたくない」という気持ちが本音だったとしても、実は、物事をそのように自分で判断できるまでに私は親神に育ててもらっている事実が根底にある。自分に都合のいい思い込みがあったとしても、親神によっていのちが与えられているからこそ思い込めるのだといえよう。どう転んでも私は自分一人で生きていたのではなく、親神から生かされているのである。

ところが、さらにその先の真実があった。というのも、親神は、私たちにいのちの恵みを与えているのみならず、それを心のままに活かしてもいいとさえ仰るのだ。つまり、たとえ信仰に義務感を感じたとしても、そもそも「我がの理」としてそのように感じられる“我が心”こそが親神からの最大のプレゼントであり、私という存在それ自体が親神からの与えなのである。実に、親神は与え切っている。

「我がの理」とは、親神の働きによって生かされているいのちに、積極的な“生きる”を重ね合わせる自らの働きといえよう。そして、その重ね方(生き方・働き方)に人間の自由があり、重ね具合の不十分さに人間の心のほこりがある。このような自覚こそが、少年会でいう「生きる喜びを味わいます」にほかならない。